

第四期、患者の訴える内容の意味を考えようとしている時期

最近1年間の経過である。今年に入ってから、患者は「もう年なのに嫁にも行かんでね」という話をしだした。そんな話を聞きながら演者は、今まで余り実感出来なかったことであるが、この患者には悲しみが一杯あるのではないかと思うようになってきた。

この治療経過を振り返ってみると、第二期において演者は、何故うんざりしてしまったかという点、第1点として、病状に対する演者の理解不足、第2点として、関わり方の未熟さ、第3点として、この患者を取り巻く状況の認識不足が上げられる。

この種の慢性分裂病者に対しては、患者の自閉をそのまま受け入れ、少しずつ共有していくことではないだろうかと思う。

以上、本日考察してきた治療の困難さは、ベテランの治療者にはすでに越えられていることであるが、初学者にとっては時々起こりやすいことではないかと思われるので、敢えてここに自戒を含めて提出した次第である。

2) 高齢アルコール依存症者の増加と臨床的特徴

熊谷 敬一・西田 牧衛
勝井 丈美・若穂田 徹
和泉 貞次 (河渡病院)

近年、高齢者のアルコール問題が増加しつつあると言われているが、その実態を把握するために、増加の程度と臨床的特徴について、河渡病院アルコール専門病棟入院患者を対象に調査を行い、その結果を報告した。

アルコール病棟の入院患者のうち、60歳以上の者が占める割合は、1979年1月から80年12月までの期間では11.3%で、1990年1月から91年6月までは26.4%であった。約10年間で2倍以上の増加を認めた。再入院者を除き、新入院患者のみのうちで60歳以上の者が占める割合を、同じ期間で比較するとそれぞれ8.8%と29.6%であり、約3倍の増加を示していた。これは、中年期に発症した患者が高齢化したという傾向よりも、高齢者の発症が増えている傾向を反映していると考えられた。毎年入院患者のうち新入院者と再入院者の割合は約10年前と最近とで大きな変化はなく、約6割強ではぼ一定していたので、高齢患者の増加傾向は、新入院者と再入院者の割合の変化によるのではないと判断された。

この報告では60歳以上の者を高齢アルコール依存症者とした。その理由は、60歳から65歳未満に発症した患者

群において、退職による生活の変化や痴呆などの老年期に特有の問題を抱えており、一定の臨床的特徴を示す場合が多いため60歳を基準に分類することが妥当であろうと思われたからである

高齢のアルコール依存症者の臨床的特徴について、1989年1月から91年6月までの2年6ヶ月間に、アルコール病棟に入院した60歳以上の新入院患者99名、うち男性96名女性3名を対象に調査した結果は次の通りである。飲酒歴の平均年齢は初飲が21歳、習慣飲酒が31歳と比較的早い年齢で生じていたが、発症はかなり遅く、60歳以上が40人であった。飲酒量が特定された者、88人のうち、清酒に換算して5合から1升までが41%、1升以上の者は39%であった。発症に際して何らかの誘因が認められた者が35人いたが、そのうち過半数の20人で退職が誘因となっていた。これは非常に特徴的な所見であった。少数ではあるが配偶者の死亡が誘因となった例も認められた。連続飲酒が認められた者が72%、離脱症状が認められた者が80%であった。随伴する精神症状で、高齢者に特有の症状は痴呆であり32%に認められた。痴呆は治療を困難にし予後を悪化させる要因である。WAISによるIQは、91%の者が100以下で、85から90にピークがあった。IQ75以下の者も37%認められた。アルコール関連臓器障害では、高血圧(30%)・肝炎(26%)・胃十二指腸潰瘍(18%)・糖尿病(18%)・肝硬変(11%)の順に多く認められた。臓器障害を持たない者は20%であった。同居家族については、配偶者がいるものが82%で、未婚・離別・別居等の単身者は11%であった。配偶者がよく保たれているということは、病前の社会的適応が良かったことを反映していると思われた。このことは、家族の協力が得られ、断酒の動機付けをしやすい点で治療上有利である。

3) 分裂病圏の家族に対する心理教育的アプローチ(1)

後藤 雅博・酒井 昭平
渋谷 博・新保 初美 (国立療養所
犀潟病院)
清水 知美 (長崎大学医学部
精神科)
大塚 俊弘

当院においては1989年より入院中の患者、DC通院患者、4町村での在宅患者のうち主として分裂病圏に属する患者家族を対象にして集団的な心理教育プログラムを実施してきている。我々のプログラムは、①従来から存在している家族会や保健所の家族教育の枠組みを利用していること、②主として長期慢性の患者家族が対